

# 令和4年度静岡県立美術館協議会 会議録

令和4年9月16日（火）

静岡県立美術館1階 講座室

発言者	発言要旨
飯田総務課長	<p>令和4年度静岡県立美術館協議会を開催いたします。私は進行役を務めます総務課長の飯田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>本日は、お手元に配付してあります次第により、本協議会を進めてまいります。</p> <p>なお、協議会の議事内容につきましては、議事録にまとめ、情報提供の推進に関する要綱に基づき一般公開することとなりますので、御了解ください。</p> <p>本日の委員の出席につきましては、お手元の静岡県立美術館協議会委員名簿のとおりでございます。</p> <p>はじめに委員の交替について、御紹介をいたします。お手元の静岡県立美術館協議会委員名簿をご覧ください。2人が新任でございます。</p> <p>名簿順に御紹介をいたします。</p> <p>社会教育区分、文化団体代表、鈴木壽美子委員の後任に、木内直秀委員です。</p> <p>学校教育区分、義務教育関係、岩崎信男委員の後任に見城秀明委員でございます。</p> <p>なお本日は、見城委員は所用により欠席でございます。それでは、木苗委員から一言御挨拶をいただければと思います。</p>
木苗委員	<p>只今ご紹介いただきました木苗直秀です。私は昨年度まで県の教育長をしておりまして、この度は静岡県文化協会会長ということで、子供さんたちを含め、県内全域の皆さんと、出来るだけコミュニケーションをとっていきたくておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。</p>
飯田総務課長	<p>ありがとうございました。それでは開会に先立ちまして、館長の木下からご挨拶を申し上げます。</p>
木下館長	<p>皆さんこんにちは。館長の木下でございます。まだ残暑厳しい中、お集まり頂きまして、ありがとうございます。最初に簡単にご挨拶を申し上げます。毎回申し上げていることですが、美術館協議会とは、そもそもどのようなものか、ということをお話ししたいと思います。これは博物館法に基づいて設置されており、静岡県の静岡県立美術館協議会設置要綱第一条に規定があります。これを毎回、朗読するようにしておりますので、少しお聞き頂きたいと思っております。</p> <p>第一条、静岡県立美術館の運営を円滑に進めるため、美術館の運営に関し、館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関である、と規定</p>

	<p>されております。これは実に明快で、皆様方の御意見を私に向けて発していただく場所です。今年には博物館法が大きく改正されました。施行は来年の4月からですが、これまで博物館法は、ある意味戦後の産物でした。教育基本法があり、学校教育法と社会教育法があり、その社会教育法に基づいて博物館法が定められております。言い換えると、博物館、美術館は社会教育施設であり、それを大前提に今日までできております。</p> <p>それがここに来て大きな曲がり角を曲がったのではないかと思います。はっきり言うと社会教育施設だけでなく文化施設でもある。文化施設であることは当たり前なのですが、その先には文化観光という言葉が登場してきました。木苗先生が教育長から、文化協会へ移られたのは、そういう流れの中にあるように思います。ということで、これから美術館がどのような方向に向いて活動を展開していくべきかということに関して、貴重な御意見を賜りたいと考えております。</p> <p>それから県立美術館は1986年に開館しまして36年目を迎えており、4年後に40周年を迎えます。40周年に向け様々なことを考えており、大きなものとしては、5ヵ年計画を策定し公表しております。お手元の資料の中に、静岡県立美術館5ヵ年計画の概要版と本編があります。これが今年度から40周年を迎える2026年度までのロードマップとなり、これに沿って活動を展開していきたいと考えております。</p> <p>挨拶はここまでで、今年度副館長が新たに替わり変わりましたので、ご紹介したいと思います。長澤副館長です。</p>
長澤副館長	<p>長澤です。どうぞよろしく願いいたします。</p>
木下館長	<p>それから、今日は出席しておりませんが、昨年度、学芸員が一人転出しまして、その代わりに4月から喜寿という学芸員が赴任しております。以上でご挨拶に代えさせていただきます。</p>
飯田総務課長	<p>ただいまから議事に移ります。これからの議事の進行は、美術館協議会設置要綱第3条第3項の規定により、会長である日比野会長に議長をお願い致します。</p> <p>それではよろしく願いします。</p>
日比野会長	<p>みなさん、こんにちは。ご苦労様です。令和4年度9月になりまして、最初の協議会となります。前年度の実績と今年度計画が資料として配付されておりますので、事務局から資料の説明をお願いします。</p>
長澤副館長	<p>副館長の長澤です。私から資料1から3に基づいて説明をいたします。はじめに、令和3年度の事業実績であります。資料1の1ページを御覧ください。</p>

1の収集についてであります。(2)の収集方針に基づき、西洋絵画・日本画・現代美術の5件を購入いたしました。また、3名の方から計9件の現代美術の寄贈をいただき、コレクションの充実を図っております。作品の保有状況は、令和3年度末現在で、2,748点となっております。

次に2の展示についてであります。2ページをご覧ください。昨年度は、エントランスホールの天井改修等を行うため、後半の半年間を休館することから、(2)の表にありますとおり、前半に3つの企画展を開催いたしました。また、休館中には、浜松市美術館において、館長監修のもと、「超」名品展と題して、質、量ともに拡充させた特別版の移動美術展を開催いたしました。

展覧会の観覧者数は、目標の101,000人に対して、53,247人でありました。これは、人の移動が抑制されて、県外からの来訪が少なかったことや、大勢の来館を見込んでいた「古代エジプト展」の後半に、コロナの状況が悪化し、来館者数が落ち込んだことなどが影響したものと考えております。

なお、展覧会の観覧者数の内訳及び年度別の観覧者数を資料2に記載しておりますので、ご参照ください。

また、それぞれの展覧会の概要及び新聞、テレビ等メディアに取り上げられた記事を別添資料としてまとめております。

次に3の教育普及事業についてであります。(1)の実技系イベント・学校連携等につきましては、コロナ前の水準には達しませんでした。多くのプログラムが中止となる中、感染防止策を講じた上でのプログラムの再開や、オンラインの活用などにより、3,600人を超える方々にご利用いただきました。

また、休館の期間を利用して、普段は行っていない出張ねんど教室を、特別支援学校で実施しました。

3ページをご覧ください。(3)の地域連携のうち、当館のボランティアにつきましては、令和3年度に募集を行う予定でありましたが、コロナ禍により活動の機会を提供できないことから、希望者には任期を1年延長いたしました。

なお、休館中には、当館所蔵品のおすすめをSNSに掲載するための記事を執筆いただくなど、活動を工夫したところあります。

イの友の会についてありますが、現在の会員は、325名となっております。新型コロナの感染状況に留意しながら、会員向けのフロアレクチャーや実技講座、講演会などを可能な形で開催いたしました。

ウのムセイオン静岡につきましては、谷田地域の文化教育7機関が連携して、文化の情報発信を図っております。毎年、「文化の丘フェスタ」において、ムセイオン7施設を巡るスタンプラリーを実施しておりますが、令和3年度は、WEBアンケート方式を利用したクイズラリーを実施いたしました。

(4)の企業との連携につきましては、「古代エジプト展」において、展覧会と連携した特別メニューを提供いたしました。

4ページをご覧ください。(5)の教育機関との連携につきましては、学芸員による博物館実習や大学への出講などを実施いたしました。

また、県内小中高校、特別支援学校には、例年「美術館教室のしおり」を配

付し、実技体験ができる各種プログラムを紹介しておりますが、令和4年度に向けては、これに加え、鑑賞のポイントなどを記載した「企画展利用案内」も併せて配付いたしました。

4の調査研究活動につきましては、学芸課研究会の実施、研究紀要の発行を通じて、コレクションや展覧会にまつわる調査を進め、その発信に努めたところであります。

5の広報につきましては、様々な広報手段を活用して、県内外への広報を推進するとともに、企画展の共催者や協賛企業等との協働による広報を進めました。

5ページの(3)を御覧ください。新たな取り組みとして、「静岡県立美術館デジタルアーカイブ」を整備し、本年4月からホームページ上に公開いたしました。この整備により、収蔵品のうち、約8割の画像をデジタルアーカイブに掲載することができ、今後は残りの画像と図書情報を順次掲載し、より多くの方に利用していただくよう努めてまいります。

また、「ストーリーズ展」での県立大学の学生への広報や、「忘れられた江戸絵画史の本流展」での県内小中高校への広報を実施したところでもあります。

さらに、移動美術展について、大学事務局のメーリングリストによる広報を実施いたしました。

「忘れられた江戸絵画史の本流展」は、有料のオンライン・プレスリリースの活用により、多数のメディアに取り上げられました。特に、インターネットの「ニコニコ美術館」では、2時間にわたり放送され、延べ2万人の視聴がありました。

令和3年7月には、県観光協会が主催する、山梨県及び長野県向けのオンラインによる教育旅行説明会に参加し、学校連携普及事業について、PRを行いました。

6の環境・施設整備につきましては、半年間の休館の間、エントランスホール天井を改修するとともに、照明を更新し、より目に優しい照明環境を実現しました。

そのほか、展示室の照明設備の更新、壁の塗替えなどにより、作品を展示・鑑賞する環境を改善したほか、エレベーターの更新などを行いました。

7の新型コロナウイルス感染拡大防止対策のうち、展覧会につきましては、「県有施設における感染防止方針」に基づき、感染防止対策を講じた上で、開催いたしました。

特に、混雑が予想された「古代エジプト展」では、時間制予約の導入により、来館者の分散を図り、鑑賞環境の改善に努めたところでもあります。

また、教育普及につきましては、6ページにありますように、新型コロナウイルス感染症の状況は、年度当初から当県の評価レベル4以上で推移し、多くの体験や学校連携のプログラムを中止せざるを得ない状況でありました。以上が、令和3年度の事業実績であります。

次に、令和4年度の事業計画・実績であります。資料3の1ページを御覧く

ださい。

1の収集につきましては、現在、寄贈の申出があり、作品取得を検討中があります。一方、今年度の購入予算は0となっており、コレクションを基盤とした美術館の運営のためには、収集方針に則った作品の購入の継続が必要であり、予算の確保は切実な課題であると考えております。

2の展示につきましては、表にあります企画展を計画しております。このうち、すでに終了した、展覧会について、報告いたします。

「大展示室展」は、昨年度後半の大規模改修工事後、空気環境を安定させるため、しばらくの間、展示を行わない、いわゆる「枯らし期間」を活用して、展示及び保存施設としての美術館の機能を紹介した展覧会でありました。作品の展示が一切なかったものの、メディアに数多く取り上げていただき、多くの皆様に観覧いただきました。

先月28日に閉幕した「兵馬俑と古代中国」展は、目標には届かなかったものの、63,000人を超えるお客様に御覧いただきました。この展覧会では、会期中、時間制予約を導入し、来館者の分散を図り、感染防止対策の徹底と鑑賞環境の改善に努めたところであります。

また、収蔵品展では、開催中の企画展と関連するテーマによる企画や、浙江省との友好提携40周年を記念する特別企画を組み入れ、様々なチャンネルを通して収蔵品展が目玉されるよう、工夫してまいります。

2ページを御覧ください。3の教育普及事業であります。

(1)の実技系イベント・学校連携につきましては、感染防止策を講じた上で、オンラインの活用も含め、計画どおりに実施できるよう努めてまいります。現在まで、計画の中止はございません。

(2)のロダンウィークにつきましては、11月3日(木・祝)から11月6日(日)に2年ぶりに開催いたします。「ロダン賞コンサート」や草薙マルシェ実行委員会との協働による「丘の上のロダンマルシェ」などを実施し、ロダン館への誘客を図ってまいります。

(3)の地域連携のうち、当館のボランティアにつきましては、先ほどご説明しましたように、昨年度、ボランティアの任期を延長したため、今年度に募集を行ってまいります。

併せて、開館以来、継続しているボランティア活動の可能性を広げられるよう、コロナ禍においても可能な活動内容を検討してまいります。

3ページを御覧ください。(4)の企業との連携につきましては、本年3月から、静岡県経営者協会と連携について、協議を開始いたしました。はじめての取組として、協会内の会員交流会において、「ビジネスとアート」をテーマに館長ほか学芸員による講演を、この9月に3回行う予定でありましたが、コロナの感染拡大により、やむなく延期となりました。

企業との連携につきましては、他の経済団体も含め、引き続き、関係強化に努めてまいります。

(5)の教育機関との連携につきましては、イにありますように、現在開催中

	<p>の「絶景を描く」展をはじめ、大学生の観覧料が無料となる自主企画展について、美術館周辺の大学の学生に向けたメールでの広報を実施してまいります。</p> <p>また、県内小中高校、特別支援学校には、昨年度末に「美術館教室のしおり」を配付しておりますが、今年度は、8月から11月にかけて、教員研修会の場に出向き、出張美術講座をはじめとした美術館の教育プログラムについて説明するなど、学校との連携を強化してまいります。</p> <p>去る8月3日には、小中学校の美術担当教員対象の研究会の場で、学芸員から説明を行ったところであります。</p> <p>5の広報につきましては、SNSの配信を積極的に行うなど、様々な広報手段を活用して、県内外への広報を推進するとともに、企画展の共催者や協賛企業等との協働による広域的な広報に努めてまいります。</p> <p>4ページの(1)のサを御覧ください。特に、昨年度整備したデジタルアーカイブについて、作品作家情報の精度の向上など、内容の充実を図るとともに、小中学校に1人1台端末が整備されたことを受け、デジタルアーカイブのコンテンツを利用して、図工・美術の授業で活用できる教育プログラムの開発を進めてまいります。</p> <p>6の環境・施設整備についてであります。美術館の本館は、開館から35年が経過し、施設の老朽化が進んでおります。引き続き、施設の適切な維持管理に努め、中期維持保全計画に基づく改修を計画的に進めてまいります。</p> <p>7の新型コロナウイルス感染拡大防止対策につきましては、引き続き、感染防止対策を講じて、展覧会、教育普及事業等を実施してまいります。</p> <p>なお、コロナ対策の一環として、「絶景を描く」展の開幕に併せて、9月10日から、非接触型の決済となるキャッシュレス決済を導入いたしました。</p> <p>説明は、以上であります。よろしく願いいたします。</p> <p>日比野会長      ありがとうございました。事務局からの連絡で、欠席委員の宮本委員と富澤委員からの意見がお手元に配られておりますので、御覧頂ければと思います。宮本さんは4ページの新型コロナウイルスと学校連携に関する意見でした。富澤さんは大展示室展、兵馬俑展及びデジタルアーカイブなどへの御意見でした。只今の、副館長さんからの御説明で御質問等はありませんでしょうか。</p> <p>望月委員      資料を全部見させて頂いて、資料2の開催実績について、見込み、実績数、パーセンテージが出ておりますが、見込み数の立て方と、それに対する年齢別内数の予想に対して、どのように分析をしているのかを教えてください。</p> <p>それから、それに合わせたコロナ対策について効果があったのかを教えてください。対策を講じることによって観覧者数の変化がどうだったのかにつながってくるかと思っております。</p> <p>飯田総務課長      観覧者数の見込みについては、前年度の予算要求時に見込み数を積算しております。これは過去の同様の展覧会の実績数を参考にしております。ストーリー</p>
--	--

ズ展と忘れられない江戸絵画の本流展は、自主企画の展覧会で、古代エジプト展は巡回展と申しまして、全国を回るものです。過去で言いますと巡回展は比較的多くの人数が入っておりますので、その数字等を参考にして、自主展覧会よりは多めに積算しております。

先ほどお話がありました一般とか大学とか小学生とか、年齢による割り振りに関しましては、まずこれも過去の人数の実績を参考にして、見込みを立てております。コロナ対策の効果につきましては、確かにコロナの影響で入館者数は少なかったのですが、コロナ対策の為に時間予約制を導入いたしました。30分ごと上限160人で設定し、お客様の入館時間をなるべく平準化するような調整をさせていただきました。その結果として館内は混雑はするのですが、一度に多くの人が入ることがなくなり、分散されたことによって効果があったと思います。過去の例では古代エジプト展などのような、沢山のお客様が見込まれる展覧会ですと、県立美術館にも駐車場があるのですが、収容台数が決まっております。お客様が分散されることによって、過去の展覧会だと駐車場に入れなくて、混乱したという話を聞きますけれども、エジプト展や今回開催した兵馬俑展でも混雑はしますが、周辺の道路事情に御迷惑をかけるようなことは無かったことがメリットとしてあげられます。

日比野会長

ありがとうございました。時間の予約やネットで事前に入場券を購入するか、時代が段々変わってきております。先日、アーディソン美術館に行ってきました。観覧料が予約ですと1600円、当日券は1800円という設定でした。当日受付で、事前の予約で構わないのでスマホで入力をお願いされました。非常に手間がかかったのですが、入力をしながら、これはデータ収集をしているのではないかと思いました。事故が起こったときに人を特定できるようにしているのかと感じました。事前予約であれば200円でも安くなりますし、美術館側にしてもコロナの追跡にも使用できますし、自分でデータを入力してそのような時代になっていくのではないかと感じました。それが習慣化して徹底されていけば、非常に混み合うということもなくなるのではないかと思います。他に何かありますか。それでは整理もしやすいので、委員の皆様にはお一人ずつ順番に御意見を伺うということで、よろしいですか？資料で令和3年度の事業実績ということで報告を頂いたわけで、実績の目次の立て方ですが、1が収集、2が展示、3が教育普及、4が調査研究活動、5が広報、6が環境・施設整備、7が新型コロナウイルス感染拡大防止対策というように、大きな目次になっておまして、7番が新しく追加された項目で6番の環境施設整備についても新しい項目なのかもしれません。先程館長さんから話がありました博物館法の話で美術館、博物館の基本的な機能として収集・展示・教育普及・調査研究であるとされております。私を感じたのは、学校との連携、企業との連携ということから連携という定義で考えていくと分かりやすいのではないかと思います。将来的に美術館の全体的な考えとして教育普及のところに連携が入ったり、広報のところに連携が入ったり、様々な所に入っているのです、「連携」

望月委員	<p>という言葉大きなテーマとして、整理をして考えていくのも一つの方法かと思ひます。</p> <p>全体的にはこれを見れば美術館の全体像が分かりますよということになるかと思ひますが、それが資料1であり、そのことについて何かありましたら御意見を願ひします。</p> <p>資料を見せさせてもらって、ロダンウィークは草薙の商店街と地域連携をしており、元々連携をとって行っており、私も参加させてもらったこともありました。是非ともロダンウィークの再開と共に、力を入れて頂いて、なるべくこの美術館を愛している人や地元の人に愛してもらって、様々な美術館の紹介が地元の人からされるようになるのが、好ましいし、望ましいので、それが目指す方向かと思ひます。、今後もロダンウィーク、商店街との連携は力を入れてやってもらいたいと思ひます。</p>
木苗委員	<p>私もロダンウィークは何回か参加したことがあります。</p>
望月委員	<p>昔草薙駅前に考える犬という像がありまして、県立大学の情報学部の教授が学生のフィールドワークを行い、一緒に歩いたりしたこともありました。その時にパン屋さんや色々な所が、犬のスタンプをおいて、みんなで回ったこともありました。スタンプラリーも回って楽しめるものがあればいいなと思ひいます。</p>
日比野会長	<p>連携は協賛金・寄付金を集めたいとか、省庁内での連携であるとか協賛金を欲しいとかということが始まりなのではと思ひます。詳しくは分からないのですが、アメリカでは寄付金が非常に重要で、デベロッパーという呼称がそれだと聞いたことがあります。寄付金を集めるとか、友の会の会員を集めるとか、連携と言いつつも、そのような開発部門のような感じかなと思ひます。ですから、担当者なり総務課内でしっかりとした仕事として、専任の人を置くような大きな仕事量として考えた方がいいと思ひます。普通ですと展覧会の担当者が新聞社と交渉したり、様々なことをしなければならぬのですが、それを一つの部署で、まとめて行うことで、効率もよくなります。美術館なり博物館なりの雰囲気が変わるといふか、お客様サービスをそういう所で把握したらどうかと思ひます。</p>
石川委員	<p>協議会に参加させて頂くにあたって、取材担当者に令和3年度の事業について聞いてきました。その記者が言っていたことは、ストーリーズ展と忘れられた江戸絵画史の本流展については、非常に学芸員さんの顔が見える好企画であったとの高い評価でした。これは意図して、このような企画をたてられたのか、そうで無かったにしても、見せ方として非常に有効な展示の仕方である思うので、どんどん取り入れていって欲しいと思ひます。それなので、意図してこの</p>



<p>石上学芸課長</p>	<p>ような企画をたてられたかどうかをお聞きしたいのと、もう一つ、江戸絵画史の本流展では絵師の人気投票を行っていたということですが、これは来場者の参加というか双方向性美術館を生み出す好企画であったと聞いております。美術館の活性化に役立ち、繋がるやり方だったと聞いてきたので、その辺の考え方をお聞きしたい。</p> <p>御意見ありがとうございます。まず、ストーリーズ展なのですが、こちらの展覧会については、実は日比野先生にもご助力をいただいたのですが、開館35周年を迎えるということで、県立美術館のコレクションも、それなりのボリュームになってきましたので、今一度、当館のコレクションの魅力を学芸員も確認し、その来歴であるとか出品歴、収蔵した当時のエピソードなどを掘り起こしながら、もう一度作品の魅力をみなさんにお伝えし直そうと考えて企画をしたものです。そういった中で、担当学芸員が所蔵品に向ける思いが企画、図録の中に表れたものになったのかなと思います。そういった意味で、学芸員という人の気配が表に感じられる展覧会になったのかなと思います。それが押しつけがましいものになってはいけないのですが、良い方に捉えていただいたのであれば、大変ありがたいことだと思います。</p> <p>それから、忘れられた江戸絵画史の本流展ですが、これは展覧会の内容としては、非常にマニアックな展示でございました。当館は開館以来、狩野派という流派に注目して展覧会を開いたり作品収集をしてきております。狩野派といっても、それがどういう人達で、どういう絵を残してきたのかということが、中々知られていない、けれども、そこに分け入ってみようという、恐らく日本でも初めての展覧会で、これまでほとんど知られていない、出品のなかった作家の作品を沢山この時期に紹介をいたしました。だからこそ、その語り方、どうやったら、この魅力をお客様に伝えられるのだろうかと担当者がよく考えました。例えばチラシの中にその江戸時代の画家と展覧会担当者が、どのように広報したらいいんだろうね、というようにラインで会話をしているような様子を再現をいたしました。人気投票という形で、なかなかイメージの湧きづらい、江戸時代の画家たちが、実はこんな人達ですよと、分かりやすく選挙ポスター風に表現して、それを見てもらうことで、親近感をもってもらえるようにしました。内容は大変専門的なものだからこそ、打ち出し方については凄く工夫をいたしました。結果として、学芸員が凄くがんばってる、こういう人がやっているんだぞ、ということが外側に見えたのかなと思います。実は、いずれも資料1の方に出ておりますが、入館者数という点では苦戦いたしました。コロナの影響等もあったかと思いますが、そういった中で、特色のある展覧会となりましたので、そのように評価をして、記憶に残していただいたのはありがたいことだと思います。</p>
<p>石川委員</p>	<p>非常に面白いチャレンジだと思いますので、是非これからも挑戦し続けていていただきたいと思います。</p>

木下館長	<p>私からも一言申し上げると、顔が見えた学芸員は担当の学芸員だけでなく、今ここに出席している学芸員のみならず過去の学芸員の顔まで見えるんです。つまりこの美術館が何を集めてきたのか、誰がそれを集めたのかということがわかります。35年の活動を検証しようという、意味合いもありましたので、開催して凄くよかったと思いました。ここまでの効果がでるとは思いませんでした。単にコレクションを公開するというよりは、そのコレクションがなぜここにこういう形であるのか、ということを検証する機会だったと思います。</p> <p>それから、もう一つの展覧会は、学芸課長が申し上げたとおりで、空前の展覧会。絶後とまでは言わないけれど、これからもあると思いますが、それ故に、結果的にこんな展覧会を可能にした学芸員の顔が見えてしまったという、そんな気がいたします。ですから、学芸員の力をいろいろな形で示せたように思います。</p> <p>それからもう一つ、今年度に入ってからですが、大展示室展を開催しました。これは、ここに数字が出ていますけれど、要するに作品が並べられなかった時期だったので、展示室しか見せなかった。それにも拘わらず7,000人の人が来たというのは、実は我々にとっては驚きであり嬉しい悲鳴であります。担当学芸員はここにいるので、顔が見えています。もし何かありましたらご質問ください。これはかなりユニークな展覧会で、静岡新聞にも大きく書いていただきました。</p> <p>ありがとうございました。それでは、曾根さんいかがですか。</p>
日比野会長	<p>私は友の会という立場で出席させていただいておりますが、友の会の会員としても、一般的なお客さんとしても展示物、特に絵画の場合ですね、その絵画の見所、つまり鑑賞の仕方をちょっとデータの的には出ている訳ですが、全部にあるとは限りませんが何か鑑賞のポイントになるような、ここに着目すると面白いということ、頻繁に出していただくと鑑賞しやすいし、興味が湧くのではないかと思います。そういうポイントを出るだけ多く表示するということが、美術ファンを増やしていく一つの手段ではないかと思います。</p>
曾根委員	<p>友の会としては、友の会も35周年で、「誰でもアーティスト展」という催し物を県民ギャラリーで実施させてもらっております。107点の作品が出品されておまして、非常にそれぞれが色々なジャンルがあり個性がよく出ている作品がありますので、これも出来ればもっとPRしたいと思っておりますが、その手段が限られております。それでも一日30～50名程の方が来て頂いております。この週末にかけても来場者を増やす努力をしていきたいと思っております。要は県立美術館自体のファンを増やす為の縁の下だと我々は思っておりますので、関心を持ってもらったり、興味を持ってもらったりする手段を出るだけ増やしていきたいし、その為は何をしたらいいかということを考えていきたいと思っております。友の会としては、木下館長にも度々講演をしていただき、「江</p>

<p>日比野会長</p> <p>角田委員</p>	<p>戸のまつりを考える」、「館長の推し 静岡県立美術館 3.5 作品」というタイトルで当美術館の作品の推しを解説していただく講演をお願いいたしました。そのようなことも、美術館への関心を深めていく手段だと思っております。その他に友の会としては何か魅力あるイベントをやりたいと思っておりますし、日帰り旅行も行っております。今年は 35 周年ということもあり、青森県立美術館と十和田市現代美術館を巡る旅をして、皆で鑑賞しようと計画いたしました。一部には館長も参加していただき我々に解説をして頂く場面があり、活気ある楽しみがあるイベントを今後も提供していきたいと思っております。自分たちも楽しみながら、他の人にも興味を持って頂けるものを実施していこうと考えて活動しております。先程申し上げた展示品の鑑賞のポイントのようなものをもう少し親切に、お節介でもいいので、鑑賞の仕方が分からなくて通り過ぎているケースが多いと思うので、何らかの方法を検討してみたらどうかと思います。</p> <p>ありがとうございました。それでは、角田委員お願いします。</p> <p>非常に素人的な所で申し訳ありませんが、曾根委員がお話しされた東北地方が台風、大雨に襲われている時に、実は私も十和田方面に行っておりました。上の娘が社会人ですが美術館巡りが好きで、自分も行ってきました。青森という土地柄と静岡は全然違いまして、美術館の位置づけも違っておりました。逆に言えば十和田の現代美術館を売りにしておりましたし、強烈に美術館の中心になっておりました。静岡の場合は申し訳ありませんが、ここだけで無く、色々な所に見られる場所がありますし、逆に言うと、先程言われた色々なすばらしい企画展がある訳ですが、コロナがありました、見てもらうというのは凄く大事な事であります。これだけ、売りが多い所だけに、上手く誘導して見てもらえる、コース作りをしたらどうかと思います。ただ、これは美術館自体で行うというよりも、県や市がタッグを組んで行うべきことではないかと思えます。これから、コロナが終息してくれば、自由に動き回ることが可能となりますので、お魚を食べて、時間が空いたら美術館で興味深いことをやっているということであれば、必ずお客様は来ます。旅行者は大体、車で来ていますしコロナで減少した分を一気に挽回するために、是非伊豆の方にも声をかけていただき、こちらに来て頂ければ、必ずみなさん感動してもらえる作品・展覧会を開催していると思えます。インバウンドも始まるでしょうから是非がんばっていただければと思えます。場所的にも最高の場所ですし、そのポテンシャルを十分発揮していただければと思えます。青森は、もうここしかありませんよという上手い宣伝の仕方をしておりますし、実際にそこしかないです。それだけにベタな感じの現代美術館で、入ったらショックを受けるような展示物がありました。よくも悪くも現代美術館なんだと、みんな納得してしまうという。本筋と離れた話で申し訳ありませんでした。</p>
--------------------------	---

堀切委員

凄く細かいところではありますが、令和3年度事業実績において、県内情報番組、県外広報実績がありマスコミにどれだけ取り上げられたかという実績が記載されております。内容の欄に学芸員インタビューなどと記載されておりますが、令和4年度の一番下の欄に植松学芸員インタビューと記載されております。なぜ、ここだけ学芸員の名前が出ているのだろうかと思ひまして。ここまで、学芸員の顔が見えなくていいのかなと。本当に重箱の隅を突くようなことで申し訳ありません。

それから、前回は申し上げましたが、五カ年計画を作成されて館長のリーダーシップの元に計画的に進めているというのは、大変素晴らしいことだと思いますので、順調に進んでいくことを心より願っております。その五カ年計画の中に記載がありますが、Webコンテンツの充実、デジタルアーカイブ等にも関係するのですが、やはりネットの活用はこれからの美術館・博物館に避けられない問題だと思います。先程お話しがありました、ストーリーズ展、忘れられた江戸絵画史の本流展、大展示室展などは私も拝見いたしました、非常に素晴らしい展覧会だと思います。非常に高評価を得ていたと思いますが、入館者数はそれほど多いものではありませんでしたが、見に来た人には高い評価を得られていたと思います。入館者数はそれほどでもないけれど、非常に評価の高いものが県立美術館にはあるんです。その入館者数という数字ではなく、評価が高い、おもしろいという人が多かったものを、形にして外にアピールできないものかと、昔から考えていました。一つには第三者評価委員会などで取り上げてもらったりするやり方があるのではないかと思います。もう少し、評判が良いということや、おもしろいと思ってる人が多いことを分かりやすい形、なんらかの形で数値化して外に発信できるような仕掛けが作れないものかなと思います。ここ数年でネットが非常に発達してきており、YOUTUBEなどフォロワーの数やSNSなどの「いいね」の数などそういうものが、ものすごく大きな評価指標として社会的に認知されて来ているわけです。こういう所に美術館も当てはめられないかと、非常に安直な発想なのですが、それが有効なのかどうかも分かりません。しかし、このような学芸員の顔が見える個性的な展覧会こそ、例えば限定のフォロワーを集めて他の人には分からない特殊な情報発信をして、そのフォロワー数をカウントしていき、それを評価基準の一つとして活用する方法もあるのではないかと思います。毎年このような資料1、資料2、資料3という資料をもらって、もちろん、これは県庁の人達も見ていると思いますが、大抵は入館者数の所しか見ないです。これで評価されたら、このような良い展覧会の良さが県庁の人や一般の方に中々伝わらない。ですから、この入館者数もちろん大事ではありますが、別の数値指標が立てられないかなと思いますし、それをネットを使って立てることが出来ないものかと感じました。ネットの活用は説明の中にもありましたが、教育普及活動でWebコンテンツを充実させる、デジタルアーカイブの整備も非常に有意義なことだと思います。教育普及でWebで出来る教材キットも積極的な活用も有効だと思います。大学でもコロナ禍でオンライン授業をやらざるを得なかったのですが、やってみる

	<p>と、オンライン授業は意外に良いものだと思います。学生も当初は対面がいいとか言っていたのですが、最近の学生にはオンライン授業は評判がいいんです。というのは、オンラインで出来ることであれば、オンラインで構わない。いちいち大学行かなくて済むので便利である。自分の時間の都合で学習出来る。普通の講義科目であればオンラインにしてくれという学生が増えております。むしろ対面でやるのであれば、対面でしかできないことをして欲しいという学生の意見が多いです。美術館の教育普及活動もやはり、対面で出来るものは対面でやらなければならないですし、オンラインで出来るものはそこに、どんどん切り替えていけば、学芸員の負担も軽くなるのかもしれませんが。一つ講義型のオンラインコンテンツを作っしまえば、使い回しをすることも出来ます。Web コンテンツを充実させるのは、最初の開発に労力が要りますが、一回作っしまえば、意外に学芸員の負担軽減に繋がるというメリットもあると思いますので、是非進めていただきたいと思います。最後に本日、ご欠席の富澤委員も Web について意見されており、なるほどなと思ったこともありますので、是非参考にしていただければと思います。その意見の一番最後に「美術展企画アプリ」という提案があります。これは恐らく、メタバースに関わることだと思います。メタバースはまだ先が見えない状態ではありますが、今すぐに美術館がこの領域に乗り込んでいくというのは、リスクであると思いますが、避けては通れないことでしょう。メタバースの研究も五カ年計画の中に絡めながら検討していけば、意外と美術館でも使えるのではないかと思います。</p>
日比野会長	<p>委員の方々から色々な意見が出ており、全部を上手くまとめるのは難しいかと思いますが、今後の参考にして頂ければと思います。資料の中の新聞の切り抜き記事の御説明を館長さんにお問い合わせできますか？</p>
木下館長	<p>これは北日本新聞の記事で、和田さんという若い記者さんが6月に取材に来られ、それが最近記事になりました。五回連載で、富山県美術館の五周年を期に特集を組んだということでした。富山県は当館と同時期の80年代に出来た美術館なのですが、完全にリセットしてリニューアルをしました。場所も違うところに移転し、全く新しい建物になり、且つデザインを大きな柱にした新しい美術館に変えてしまったのですが、五年が経過するといろいろな問題が出てきたということで、新聞社がそれを取り上げました。その中で、調査研究が十分に行われていないという認識の基に当館に来られました。たまたま取材に来られたのが、この美術館が開館以来続けていた、学芸員の研究会の日だったので、彼女も一緒に同席してもらいました。これは日比野会長が当館の学芸員だった時代からのことだと思いますが、毎月一回学芸員が研究発表をしてきた。これは業務時間に行っておりまして、当然公務で行っております。美術館によっては、学芸員が発表するというのは、業務時間以外に行う所もあります。当館はそうでは無く、美術館活動の基盤は学芸員の調査研究であるという姿勢を堅持しております。これまでも堅持してきましたし、これからもそうしたいと思</p>

	<p>っております。その辺が評価され、大きく掲載していただきました。やはりこれまで築いてきたものの上に、今の我々がいるのだと思っています。美術館は、このようなきちんとした調査研究に基づいた活動を展開できるのか。集客にばかり目を向けた時に、やはり活動が最終的に弱まってしまうのではないかと思います。これは、我々としても、このように取り上げてくれたということが良かったし、我々も改めて研究会の意義を認識した活動を展開していきたいと考えています。</p>
日比野会長	<p>ありがとうございます。どこの美術館のことかなと思って、ずっと最後まで読んだら富山県美術館ということが分かったのですが、先程、お話しがありましたとおり、静岡県立美術館が出来る少し前に富山県美術館、前は近代美術館と言ってまして、完全に現代美術を主とし、小川正隆という朝日新聞社の記者が初代館長でした。その小川さんがこの美術館にお出でになって、少しお話しをしたことがありました。現代美術が主と言うことで入館者数が少ないこともあり、小川さんの言い方では、うちの美術館の入館者は質が違うと。近くの人では無く、東京、大阪、京都などの専門家が来るんだと。年間2万人という非常に少ない数字で、田舎の人は来ないような非常に評価の高い美術館であるというようなことをおっしゃってました。いずれにしても現代美術でかなり良い作品を集めていました。それからこの新しい美術館が5年前に開館し雪山行二さんという富山出身の国立西洋美術館にいた方が館長になられて、以前お話しをする機会がありました。知事から金沢21世紀には負けるなど、人を稼げと言われてと言っていました。あそこは屋上が庭園のようになっておまして、無料で入れる場所が多く、私が最初に行ったときにはお客さんも多く、展示室も広く、これが毎日続くと大変だろうなと思いました。それから5年が経ち、館のトップも行政職員に代わったと記載されています。そういうことで方針や締め付けが厳しいという話ですが、どうでしょうか？</p>
木下館長	<p>この背景には知事が代わったということがあります。それから館長が代わったのですが、背景は色々あるかと思います。最初おっしゃったように近代美術館時代の館長は小川正隆という非常に有名な美術記者で、まさに落下傘館長と言われていました。突然、空から降りてきたために地元が反発しました。この軋轢がずっと続いてしまったんですね。その結果として天皇の肖像問題が間もなく起きるのですが、それらを全部リセットする意味合いも間違いなくあったかと思います。アート&amp;デザインというコンセプトの美術館にしようとしたのですが、地元の作家達がデザインを入れることに反発を示したという問題は、常にどこの公立美術館では抱えていると思います。もう一つは目と鼻の先に金沢21世紀美術館があり、集客という面では大成功を収めている。ただ建物を見たいとい人も増えています。それに追いつけ追い越せというスローガンで動いて作られたという一面があり、長い時間を掛けて基盤を築いてきたとは言えないかもしれません。5年が経過して少しガタついているなという印象はもっ</p>

<p>日比野会長</p>	<p>ています。</p> <p>なぜロダン館が出来たのかと色々議論があったのですが、ロダンはみんなが知っているの、自然に人が集まってくるので、学芸員はゆっくり勉強をすればいい。良い展覧会をすれば人が集まってくるということで、最初の頃は大きな展覧会をやっていた。それで人が来たと思いますが、今はそれでは中々人が来ないので、色々な工夫が必要となってきました。昨年度の実績でお話しのあったとおり、工夫が人を呼んでいるということがあるかと思いますが。やはり良い展覧会、良い内容のものでなければ人が集まらないということでしょうか。</p> <p>木苗先生は学校もご存じなので、何か御意見はありますか。</p>
<p>木苗委員</p>	<p>お話を聞いていて、コロナ禍の中で集客も非常に大変なんだと思いますし、学校も図書館も距離をとるために椅子を間引くなど対策をしていかなければならなかった。その時代、時代によって柔軟に対応していく姿勢は大事ではないかと思います。みなさんのお話は非常に参考になりました。</p>
<p>日比野会長</p>	<p>予算要求などで入館者数が少ないというのは大きな宿題でしょうし、お客さんが多ければ館で働いている人も嬉しいでしょう。</p> <p>最後に皆さんから御意見があれば。</p>
<p>望月委員</p>	<p>私は観光関係の業務をしているのですが、これからの事業を県へ話をするときには歴史文化を今一度見直して、そこを誘客の為の素材に使いながらストーリーを作っていく展開を行っております。その中で美術館の色々な取組で教育旅行などは協力してもらっていますが、それ以外にそもそも歴史文化系の施設という位置づけの中に、館長さんがおっしゃるように観光にも、ということであれば、そこに施策的な事業建ての中で、公金を使ったものもありますので、その枠組みを使うのも面白いかなと思いました。</p>
<p>木下館長</p>	<p>最後に一言申し上げます。最初に日比野会長から今日示した資料の目次建てについてのご指摘がありましたが、連携という言葉の使い方が整理されていないと改めて思いました。実は我々が昨年あたりから5ヵ年計画を策定する段階で美術館の活動が具体的にどのようなことをやっているのかを、どう整理したらということ、ここに八つの形で示したのです。色々な所で色々なレベルで連携をしていくべきであり、それは広報であり、教育であり、サポートをお願いするという意味では運営であります。この項目建てと本日配付した事業実績の項目が整合性がとれていなかったと思いましたが、この辺りも今一度館の方で整理していこうと思います。それから、堀切副会長からメタバースの話がありました。コロナ禍がもう2年半続いており、最初の1年は美術館に限らず世の中全てがどうなっていくか分からないままに、簡単に休館するという形で</p>

	<p>門を閉ざした時期がありました。結局 With コロナでやっていくしかないだろうと思います。そうすると、今日話題になった入場制限をかけることも、間違いなく美術館を居心地のいい環境にすることに繋がっていきます。コロナ禍を経験してどのように変えていくのかということが、まさに問われているのではないかと思います。これは本当に切実な問題で、これまでは物を並べて展示室に作品を並べてここに来てくださの一辺倒でありました。これからはそうでは無くて情報を発信し、リアルな美術館に加えて、バーチャルな美術館がもう一つあるという方向が求められているし、この二つの美術館をどのように両立させていくのかという所に立っていると思います。そうなった時に、富澤委員の最後のコメントにあったように、メタバースはこれから取り組んでいかなければならないものでありますが、バーチャルに美術館をもう一つ作り上げていくということは、例えば観光とどのように繋がっていくのかという問題に繋がっていきます。冒頭で申し上げたとおり博物館法が改正され文化観光という言葉が前面に出てきています。これまでの観光の概念を変えていかなければならないと思っています。単に文化施設を巡るのが観光とは限らないと。美術館の中でも観光を作り上げていくと、リアルだけでなくバーチャルな美術館体系の可能性をこれから追求していかなければならないと皆様の御意見をうけたまわりながら考えました。ありがとうございました。</p>
日比野会長	<p>それでは進行を事務局にお返しします。</p>
飯田総務課長	<p>委員の皆様には、長時間に亘り御審議いただき、ありがとうございました。頂きました御意見は、これからの美術館運営に役立てていきたいと存じます。本日はありがとうございました。</p>